

連峯堂 彩り 歳末号

RENPOUDO'S COLLECTION WINTER.

HP



Instagram



奥田連峯堂

TEL:075-561-3655

FAX:075-525-1148

営業時間：11時 - 18時

定休日：毎週水曜

〒605-0073 京都市東山区祇園町北側244

<https://www.renpoudo.com>

✉ renpoudo@mth.biglobe.ne.jp

1.

三田青磁 獅子香炉

幕末 - 明治

径25.5cm×17cm 高さ27.5cm

深い緑色をした青磁の獅子形の香炉です。
口や片方の鼻が透かしになっています。
口の両端に窯で焼成中にできた窯キズの切れ目があります。鼻の下、あごにニューがあります。
尾の根元にも窯キズの切れ目があります。

三田青磁は今の兵庫県三田市で江戸時代後期頃より生産が始まり、昭和初期頃まで生産されました。中国の龍泉青磁、韓国の高麗青磁と並び、世界三大青磁と称されました。



2.

古伊万里 瑠璃釉香炉

江戸時代

径7.8cm 高さ7.5cm

深い藍色の香炉です。全体的に瑠璃釉を掛けてあります。
側面が竹の節のように凹凸になっています。
三つ足になっています。
側面に焼成中にできた窯キズが見られます。



3.

古清水 水葵文香炉

江戸時代

径9.5cm 高さ10cm

細かい貫入の素地に、胴には葵の文様が描かれています。

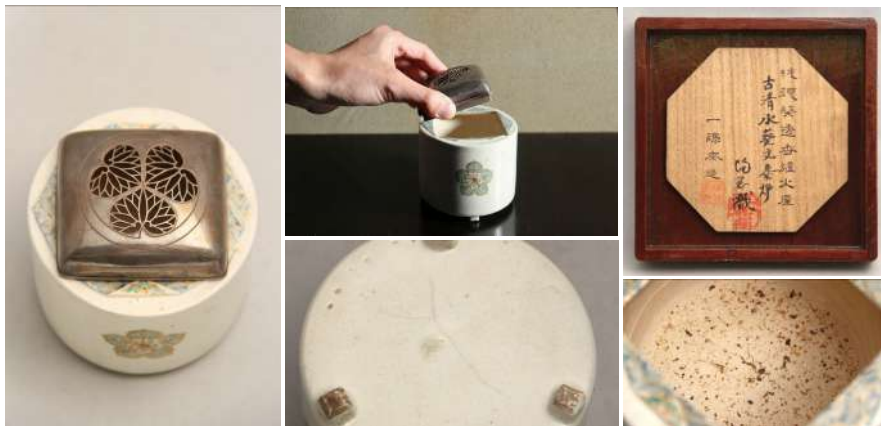
火屋は、純銀製で、こちらにも葵文様が透かしてあります。

一鶴斎によって制作されました。

一鶴斎は本名を永田富次郎と言います。名古屋で明治期に活躍した金工の一人とされます。

箱の蓋裏に、一鶴斎の署名と、昭和を代表する美濃焼の陶芸家、人間国宝の荒川豊蔵の極め書きがあります。

見込みに窯キズと、高台にトリアシが見られます。



4.

祥瑞 蓮池鷺図蓮華形皿

中国 明時代（17世紀）

径22cm 高さ4cm

見込みに蓮池と鷺が描かれています。高台は角福の銘があります。

中国 明時代末期 景德鎮民窯では古染付・祥瑞・南京赤絵と呼ばれるやきものが作られ、日本に渡ってきました。



5.

青磁桃置物

楠部 弥弍

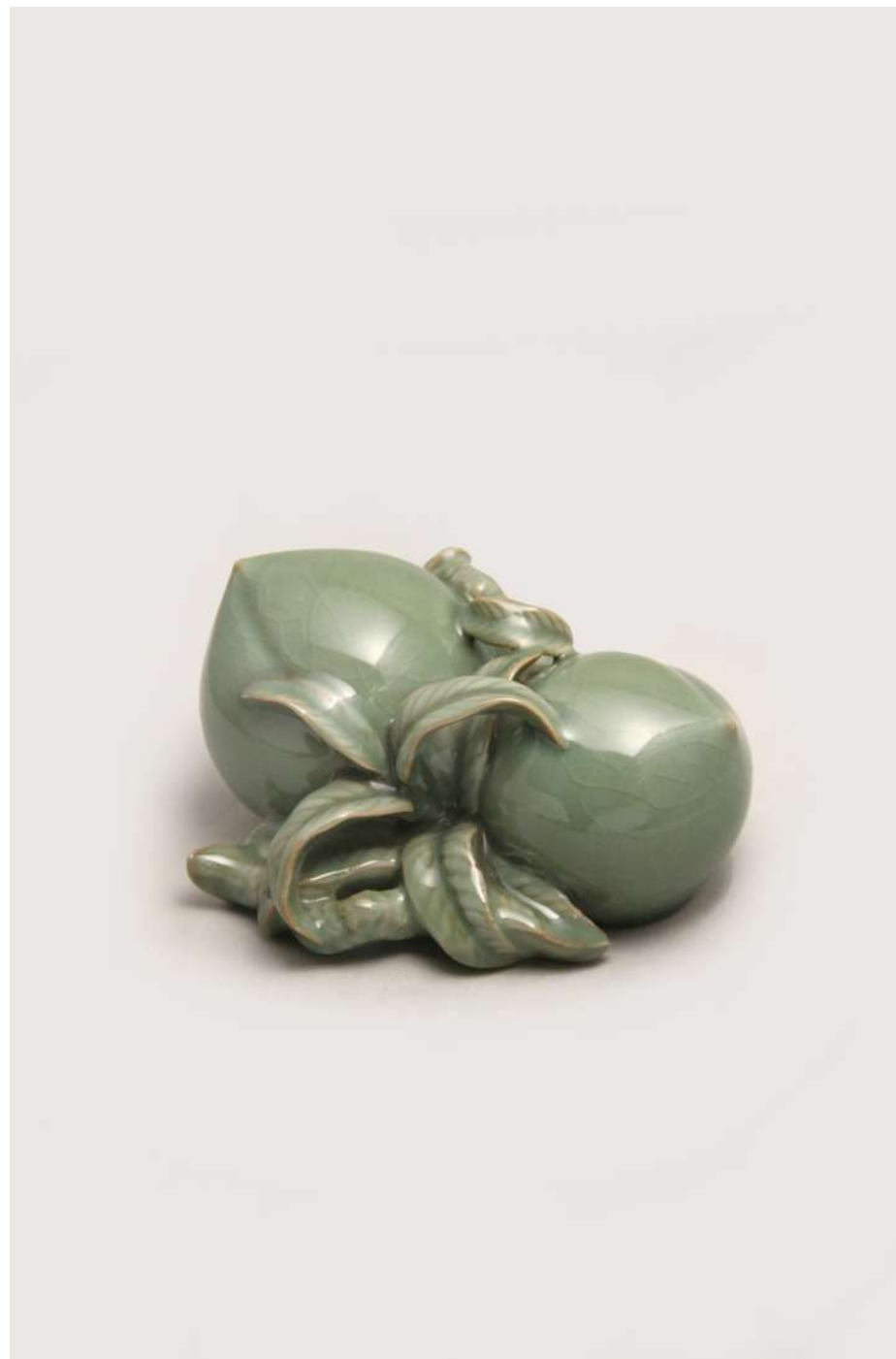
共箱

昭和

径18.5cm×17cm 高さ9cm

全体に貫入が入り、青磁の深い青緑色の釉調と相まって素晴らしい桃の置物です

楠部 弥弍は、京都市生まれの陶芸家で大正から昭和にかけて活躍しました。作風は多技多彩で知られます。技法は違っても作品の出来にばらつきがなく、どれも優れた完成度の高い作品です。また、後進の指導にも尽力し、多くの弟子を育てました。



6.

備前壺

小山 富士夫

共箱

昭和

口径10cm 胴径18cm 高さ15cm

小山富士夫は、陶芸家であり、中国陶磁器研究の大家でもありました。また、多くの陶芸家とも親交が深く、各地の陶芸家のもとを訪ね様々な種類の作品を制作しました。本作品も備前の陶芸家のもとで制作したものではないでしょうか。古山子は陶芸家としての号です。



7.

秋叢香炉

6代 清水 六兵衛

共箱
火屋 加藤宗厳
昭和
径9.5cm 高さ12cm

秋叢（秋草）の文様が金彩や朱を用いて描かれた香炉です。

6代清水六兵衛は、江戸時代中期以来の清水焼陶工の名跡です。
6代六兵衛は、京都市立絵画専門学校で、竹内栖鳳や山元春挙らに日本画を学びました。

火屋を制作した加藤宗厳は、京都の金工師です。父 嘉七に金属を叩いて鍛え彫る彫鍛金技術を学びました。



8.

呉須四方扁壺

河井 寛次郎

河井つね極箱

昭和

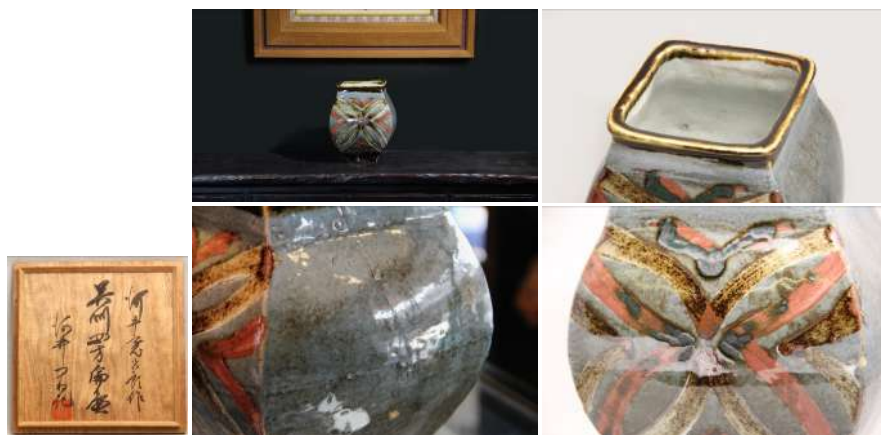
口径15cm×14.5cm 胴径21cm×20.5cm 高さ24cm

四方の寛次郎の作品では大きめの壺です。

上から見ると少し歪みがあります。

四面の内、二面に菱花文様が辰砂、呉須、鉄釉で描かれています。

寛次郎の妻の河井つねの箱書きがあります。



9.

福如海鉢

河井 寛次郎

共箱

大正

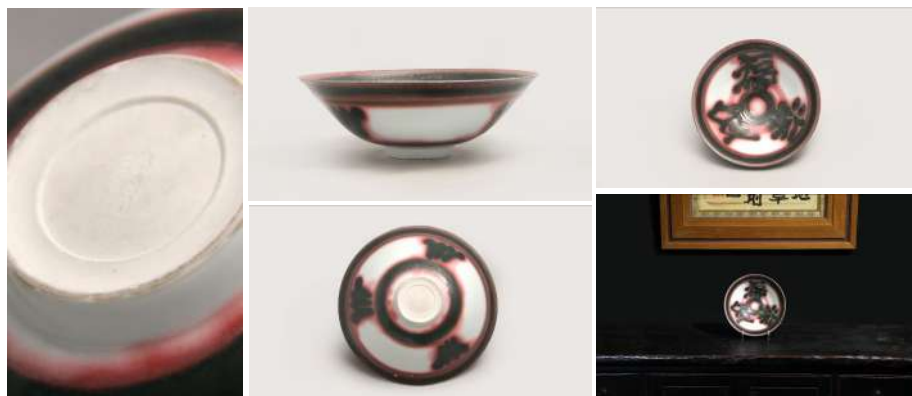
径20.5cm 高さ7cm

見込みに福如海と文字が書かれた鉢です。

「福如海」は、全てに感謝すると海のように無限に福が湧いてくる、という意味になります。

河井寛次郎の初期の作品です。高台内に鐘溪窯の印があります。

「ふるさと安芸に贈られた河井寛次郎のころ」図録に類似品が掲載されています。



10.

菱花鉢

河井 寛次郎

共箱

昭和

径21.5cm 高さ6.8cm

辰砂釉の赤色が特徴的な鉢です。寛次郎らしい分厚めの作品です。

見込みには菱形の文様が描かれ、その周りには花文様があしらわれています。



11.

鉄絵柳文皿

バーナード・リーチ

昭和

径27.5cm 高さ5.5cm

柳の木の下に鳥が泳いでいる様子が描かれています。
高台内にBLの描銘が、高台脇にリーチポタリーの印があります。
共箱は無く、無地の合箱になります。



12.

地釉縄文象嵌絵変組皿 6客組

島岡 達三

共箱
昭和 - 平成
人間国宝
径18cm 高さ3cm

6枚とも文様の違う絵替わりになっています。島岡達三の特徴である縄文象嵌の技法が用いられています。1客縁に窯キズがあります。

島岡達三は大正8年、東京都で組紐師の長男として生まれました。

その後、濱田庄司に師事します。組紐師である父の組紐に着想を得て、組紐を器面に転がして跡を付け、そこに化粧土を埋め込む独自の縄文象嵌技法を編み出しました。その技法で人間国宝に認定されました。



13.

仁清写雲錦向付 10客組

永楽 即全 (16代 永楽 善五郎)

共箱

昭和 - 平成

径12cm 高さ6.5cm

桜と紅葉の雲錦文様が側面に描かれた向付です。
ところどころ、桜の花びらの形に透かしが施されています。



14.

雀蒔絵厚物椀 10客組

道宗

径13.5cm 高さ7.8cm

蓋の表側に雀が、蓋の裏と見込みには稲穂が蒔絵されたお椀です。

稲穂には豊作・豊穰というおめでたい意味があります。



15.

菊菖蒲蒔絵鼓胴

皮付

鼓：径10cm 高さ25cm

鼓胴には、様々な文様の蒔絵が施されています。
縁は小さなへこみなどが見られます。皮も付いております。

鼓胴は能、歌舞伎や狂言などで使われる楽器の一つで、太鼓として使います。かつて鼓は屋外で演奏されることが多い楽器でした。そのため、遠くまで良く音が通るくふうが重ねられ、このような形に発達していきました。花入に見立てて使われることもあります。



16.

桜桃蒔絵棗

奥出 寿泉、中里 壽

共箱
昭和
径7cm 高さ7cm

黒地に桜桃（さくらんぼ）と鳥が描かれた棗です。

内側は黒地になっています。

中里 壽と奥出 寿泉の合作です。

中里 壽は、福島県出身の漆芸家、研究家です。

奥出 寿泉は、石川県小松市出身で人間国宝の漆芸家 松田権六作品のきゅう漆（塗り）をしばしば担当しました。

胴の下の方に中里 壽の「壽」の銘があります。



17.

「木々芽グム時充チテ」

柳 宗悦

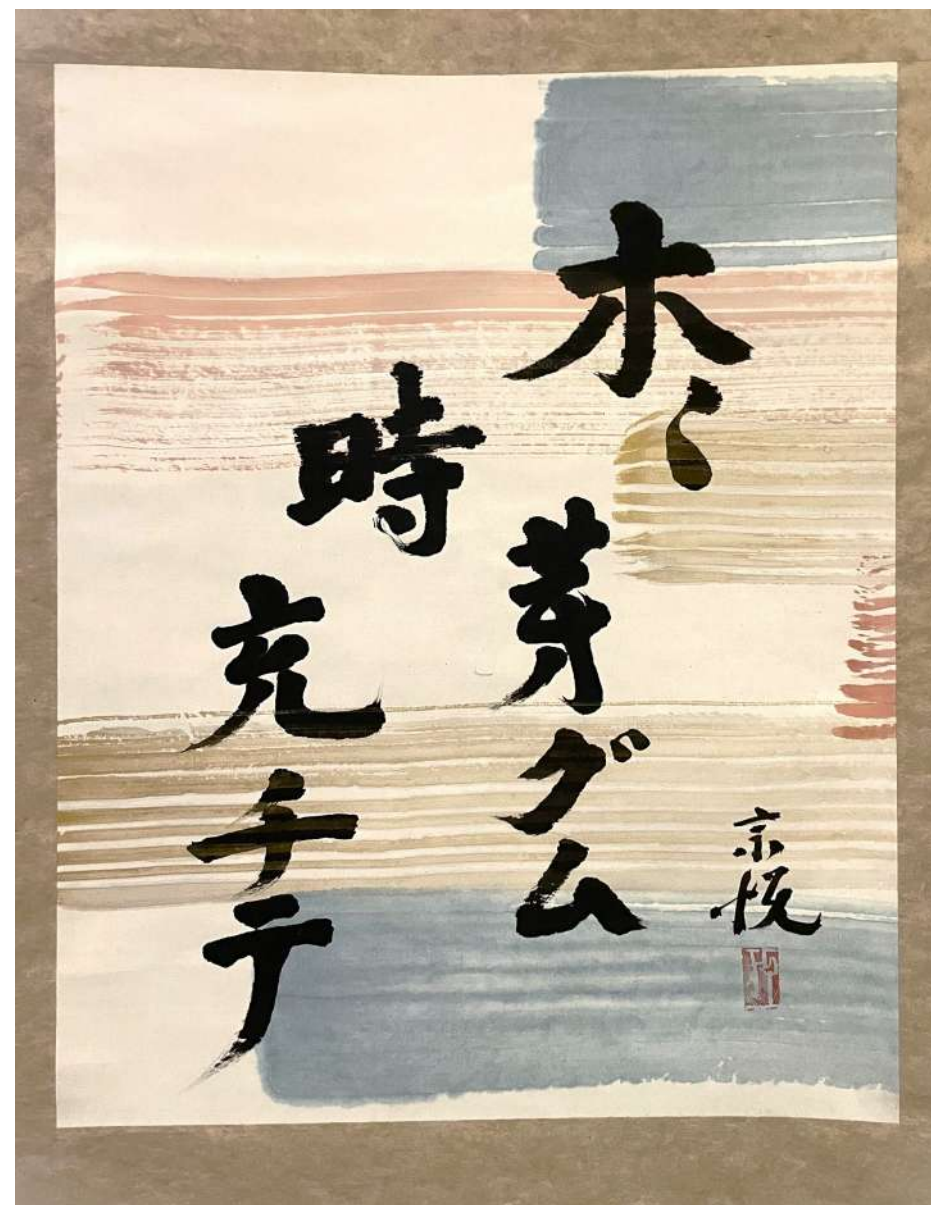
紙本

濱田庄司 識箱

昭和

幅44cm 長さ104cm

柳宗悦は、西洋宗教哲学、仏教思想を学び、民藝運動に心血を注ぐなかで、美と浄土を結びつけ独自の宗教思想を追求しました。柳宗悦は、本作品のような言葉を「心偈（こころうた）」として、まとめています。心偈は、「自分を練磨するための自少自戒のために、記し始めたのがその発端であり、何も説法ではない。同じような問題に思いあぐむ人々に、多少の示唆となれば有難い。」と話しています。



18.

額 彩色花籠図

土佐 光貞

江戸時代

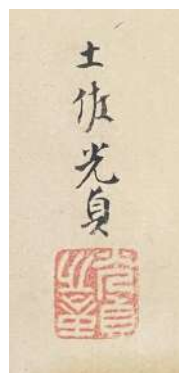
額のサイズ：縦51cm 横41.5cm

土佐派は日本的な大和絵の技法を樹立し、室町時代より朝廷の
絵所を代々世襲しました。

桃山時代に一度衰退しますが、江戸時代になり再興しました。

朝顔や茄子などが籠に盛られています。

元々は軸装だったものが額装されたものです。



19.

額 「未覚池塘春草夢」

中川 一政

昭和 - 平成

額のサイズ：縦55cm 横70cm

少年易老学難成
一寸光陰不可輕
未覚池塘春草夢
階前梧葉已秋声

書かれている漢詩は上記の後半部分になります。

後半部分の意味は以下になります。

池の堤の若草の上でまどろんだ春の日の夢がまだ覚めないうちに、階段の前の青桐（あおぎり）の葉には、もう秋風の音が聞かれるように、月日は速やかに過ぎ去ってしまうものである。

中川一政は日本洋画壇を代表する画家でしたが、絵画以外にも本作のような書や陶芸、装丁デザイン、随筆、詩などを制作し、多才でありました。



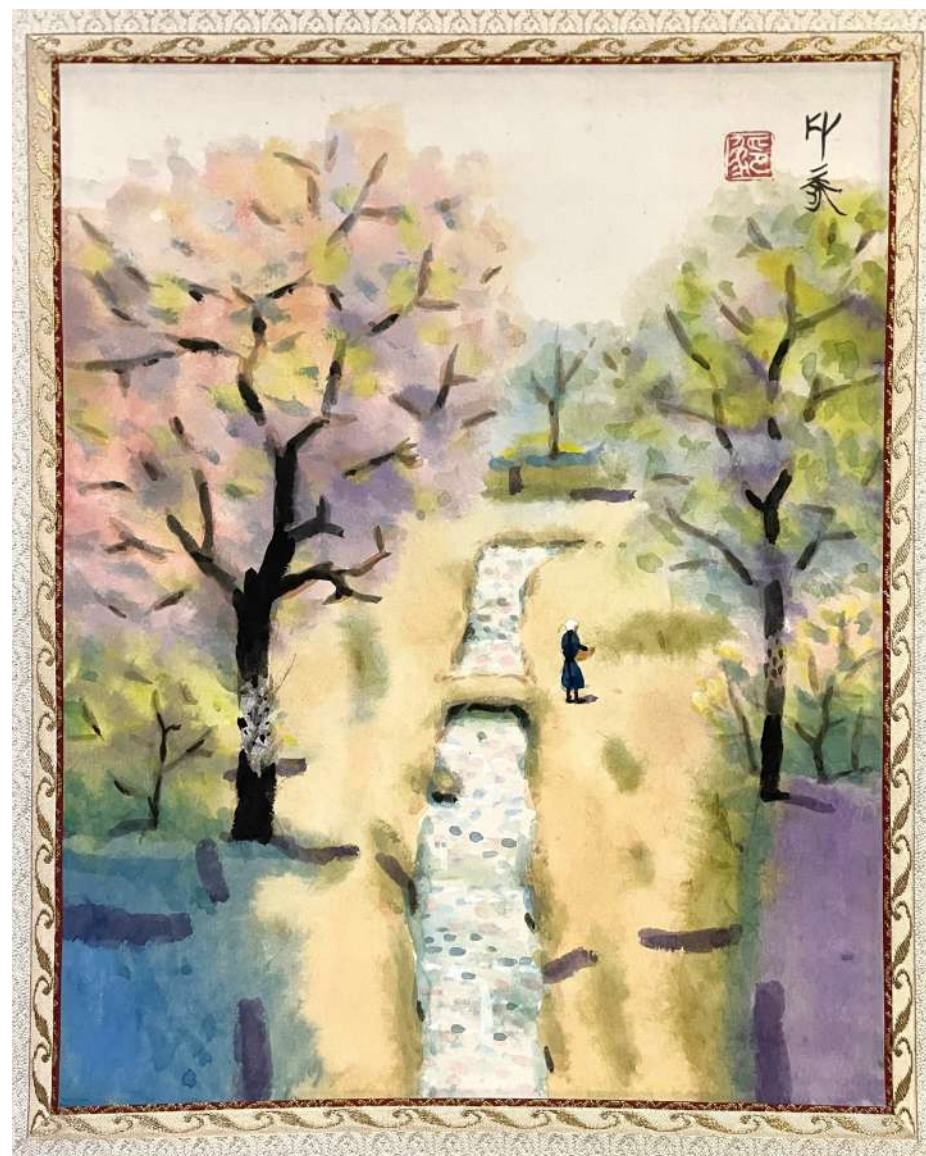
20.

澄む水流れる幅

堂本 印象

紙本
共箱
大正 - 昭和
幅39cm 長さ119cm

中央に小さな川が流れており、川の左右には彩り豊かな木々や作業する人物が描かれております。
表装の下部分に少し黒い汚れが見られます。



21.

額 扇の女

須田 剋太

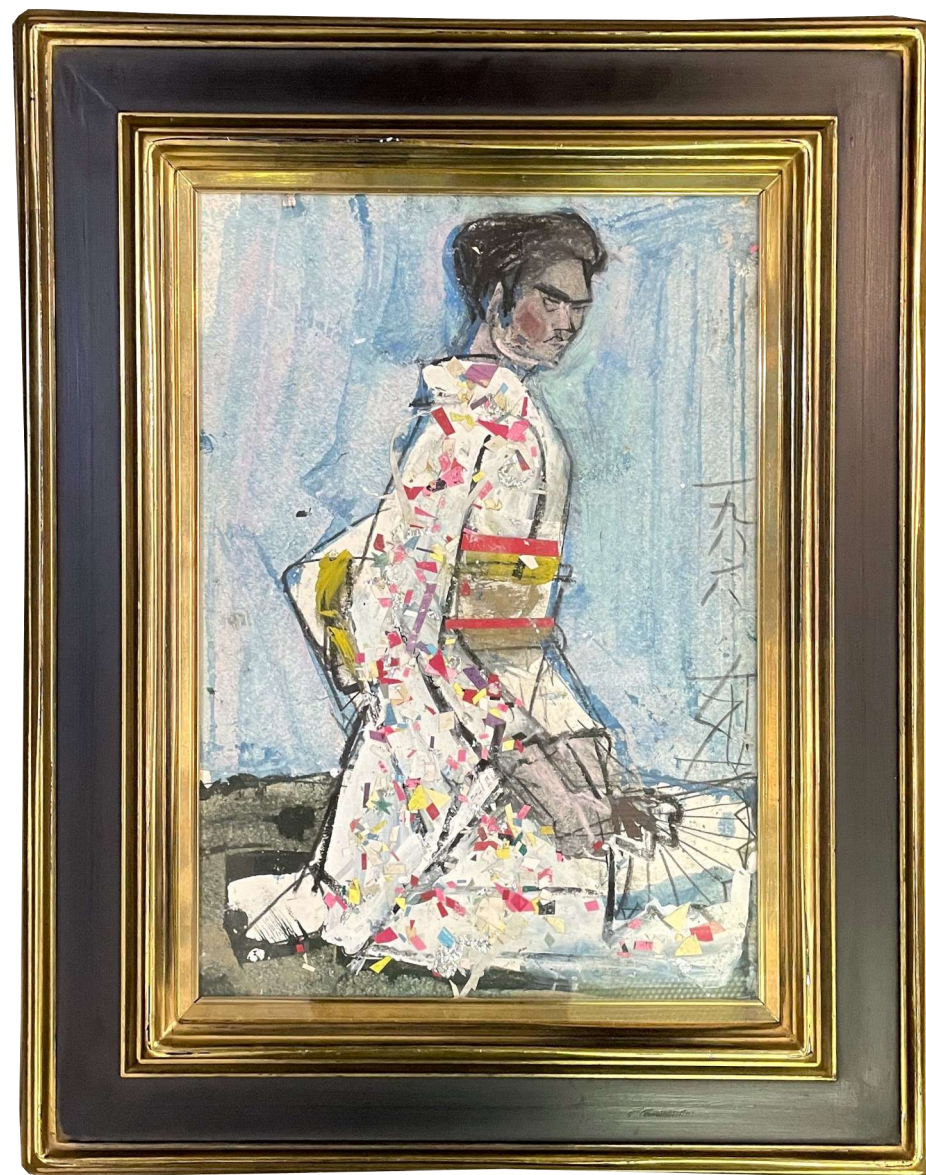
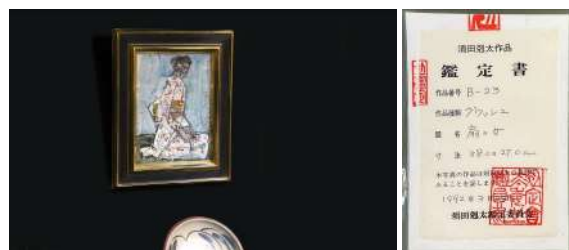
グワッシュ

須田剋太鑑定委員会 鑑定書

昭和

額のサイズ：縦53cm 横42cm

司馬遼太郎「街道をゆく」シリーズの挿絵で知られる須田剋太による作品です。着物の柄に様々な色の紙がコラージュされています。右下に「一九八六 剋」と書かれています。額装は須田剋太作品の額装を多く手掛けたカナタ製です。



22.

天下太平字幅

須田 剋太

須田剋太鑑定委員会 鑑定書

昭和

幅62cm 長さ216cm

大変迫力のある書体で「天下太平群仙遊楽」と書かれています。

「天下太平」は、国に争いごともなく平和である様子を言います。天下泰平とも書きます。

「群仙」は、多くの仙人、または、素晴らしい人々の集まっているさまを例えます。

「遊楽」は、遊んで楽しむことを言います。



作家略歴（五十音順）

永楽 即全（16代永楽善五郎）

1917（大正6）年 - 1998（平成10）年
14代得全の甥15代正全の子。妙全の養嗣子。三井家・三千家に入入りし数々の名品を作る。茶道隆盛と共に現代の名工の一人に数えられる。

奥出 寿泉

1916（大正5）年 - 1973（昭和48）年
本名 奥出治郎。石川県小松市那谷町の人。日本工芸会正会員。松田権六作品のきゅう漆（塗り）をしばしば担当した。朱塗りに長じる。東京国立近代美術館工芸館に「乾漆香盆」（昭和44年、第16回日本伝統工芸展に出品）がある。

河井寛次郎

1890（明治23）年 - 1966（昭和41）年
島根県生まれ。東京高等工業学校窯業科卒後、京都市陶磁器試験場に入所。京都市五条坂に窯を築き作陶を行う。東洋古陶磁の技法による作品を制作していたが、民藝運動に関わり、実用を意識した作品に取り組むようになる。文化勲章、人間国宝、芸術院会員への推薦を辞退。

楠部 彌弌

1897（明治30）年 - 1984（昭和59）年
染付、青磁、鈞窯、仁清風など、作風は多技多彩。彩埴と名付けた釉下彩磁は独自のものである。また京焼の伝統を踏まえた色絵は優美と言われる。帝展や日展などで活躍。昭和53年、文化勲章受章。

小山 富士夫

1900(明治33)年 - 1975(昭和50)年
中国陶磁器研究の大家・陶芸家。号：古山子。岡山県浅口郡玉島町（現・倉敷市玉島）出身。主に鎌倉市を拠点にして執筆、陶磁器研究では、中国北宋時代の名窯、定窯跡を発見し、世界的な陶磁学者として名声を確立。晩年に至るまで実証的東洋陶磁研究をして、古陶磁研究書など多く執筆寄稿。晩年には、岐阜県土岐市泉町に「花の木窯」を開き作陶。陶芸家として、茶器を始め多様な作品を造った。

島岡 達三

1919（大正8）年 - 2007（平成19）年
組紐屋の息子として東京に生まれる。浜田庄司に学び、1953年、益子に窯を築く。組紐を転がし、そこに化粧土をかける縄文象嵌という独自の技法を生み出す。世界各地で個展を開き賞賛を受ける。1996年、人間国宝認定。

須田 尅太

1906（明治39）年 - 1990（平成2）年
日本の洋画家。埼玉県生。浦和画家。当初具象画の世界で官展の特選を重ねたが、1949年以降抽象画へと進む。力強い奔放なタッチが特徴と評される。司馬遼太郎の紀行文集『街道をゆく』の挿絵を担当し、また取材旅行にも同行した。

堂本 印象

1891（明治24）年 - 1975（昭和50）年
京都の醸造業の家に生れた。京都市立絵画専門学校を卒業後、西山翠嶂に師事。帝展に出品を続け、第1回展に入選後、特選や帝国美術院賞を受け、画壇に地位を築く。画塾東丘社を主宰。帝展審査員、京都市立絵画専門学校教授、帝室技芸員をつとめた。日本芸術院会員、文化勲章を受章。京都に堂本印象美術館がある。

土佐 光貞

1738（元文3）年 - 1806（文化3）年
土佐光芳の次男として生まれる。宝暦4年（1754年）分家して、従六位上、内匠大屬となり、本家の光淳と並んで禁裏絵所預となる。享和2年（1802年）従四位上に叙せられた。寛政度内裏障壁画造営では、兄が亡くなっていたためその子の土佐光時の代わりに中心人物として活躍、自身も清涼殿の障壁画を描いた。兄よりも長生きし画才も優れていたこともあり、以後の土佐家は本家より光貞の分家の方が繁栄することになる。弟子に田中訥言など。

中里 壽（寿克）

1936（昭和11）年 -
福島県出身の漆芸家・漆工芸史研究者。日本伝統工芸展（日本工芸会）など。研究者としての著書も多い。作品所蔵に兎文櫻桃蒔絵手箱、唐草文平文螺鈿蒔絵小箱（ともに福島県立博物館）などがある。

濱田 庄司

1894（明治27）年 - 1978（昭和53）年
神奈川県生まれ。東京高等工業学校（現東京工業大学）窯業科に入学、板谷波山に師事。同校を卒業後は、河井

寛次郎と共に京都市立陶芸試験場にて主に釉薬の研究を行う。この頃、柳宗悦、富本憲吉、バーナード・リーチの知遇を得る。大正9年、イギリスに帰国するリーチに同行、共同してセント・アイヴスに築窯。大正13年、帰国し、沖縄 壺屋窯などで学び、その後、栃木県益子町で作陶を開始。昭和30年、人間国宝に認定。

バーナード・リーチ

1887(明治20)年 - 1979(昭和54)年
香港生まれ。幼年は日本で過ごし、帰英後はロンドンでエッチングなどを学ぶ。1909年に再来日し、六代尾形乾山に弟子入りして陶芸の道を歩む。その後、柳宗悦、富本憲吉や志賀直哉ら白樺派同人と交友して日本の芸術の新しい動向に触れ、美術や陶磁器への関心を高めた。1920年、浜田庄司を伴って帰英、浜田と共に日本風の窯を築き、スリップウェアの研究と復活に努めた。1934年、再び来日し、益子や東京、布志名などの窯を巡り製作を。宗悦、河井寛次郎等と共に民藝の普及に尽力し、海外でも講演を行い、国際的な陶芸家の第一人者となる。

柳 宗悦

1889（明治22）年 - 1961（昭和36）年
民藝運動の提唱者。民藝の父とも呼ばれる。東京生。東京帝國大学在学中に、同人雑誌グループ白樺派に参加。富本憲吉・浜田庄司・河井寛次郎と共に生活に即した民芸品に注目して「用の美」を唱え、民藝運動を起こした。昭和11年、東京都目黒区に日本民藝館を設立。戦前、北海道、東北、沖縄、台湾などの工芸の紹介に尽力した。昭和32年、文化功労者。